Osaka University Knowledge Archive

Title	Three Types of Imperatives and Related Constructions : A Contrastive Study of English and Japanese
Author(s)	森, 英樹
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49111
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【35】

氏　　名	森（もり）　英（ひで）　樹（き）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１６９８　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年３月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	Three Types of Imperatives and Related Constructions: A Contrastive Study of English and Japanese （３つの命令文と関連構文：日英語対照研究）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　大庭　幸男 （副査） 教　授　加藤　正治　　准教授　岡田　禎之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英語と日本語の命令文を対照しつつ、３つのタイプの命令文とその関連構文について、共時的・通時的分析を試みたものである。全体は８章からなり、総頁（英文）数は A4 判 ix＋240 頁である。

まず第１章で、研究対象となる命令文の実際のデータが示されるとともに、本研究の３つの目的（①日英語の命令文の基本的なタイプを特定すること、②命令文と他の構文との関係を考察すること、③命令文の共時的・通時的動機付けを探ること）が設定される。

第２章では、理論的背景として、現実性・非現実性の連続体、構文文法、意味変化の概念が紹介された後、本論文で分析対象となる命令文が、形式（命令形や無主語等）と意味（行為要請）の融合体として定義される。

第３章では、命令文がさまざまな観察から３つのタイプに分類されることが提案される。この分類は、命題内容に対する話者の現実性・非現実性の判断に基づいており、潜在型のものを「タイプⅠ」、既存型のものを「タイプⅢ」、その中間に当たるものを「タイプⅡ」としている。現実性・非現実性の概念は、従来、条件文等の命令文以外の意味分析に用いられてきたものであるが、本論文ではこの概念が命令文の研究にも有効であるだけでなく、この概念によって否定命令文と肯定命令文が統一的に扱えること、また、類型論的に可能な命令文のタイプが網羅的に記述できることなども示される。

第４章から第６章は日英語の比較対照において興味深い「タイプⅡ」と「タイプⅢ」のケーススタディが行われる。ここでは、構文間のネットワークを図示することにより、命令構文と他の構文との共時的・通時的関連性が明確に記述される。

第４章では、英語の「タイプⅡ」について考察し、「タイプⅡ」は *if* 条件文・「タイプⅠ」と共時的リンク（多義性）によって関係付けられ、*and* 等位構造と通時的リンク（文法化）によって関連付けられる。

第５章では、日本語の「タイプⅡ」について考察し、共時的には条件文と多義性リンクによって関連付けられ、通時的には視覚動詞「みる」の命令形を含む節接続構造と文法化というリンクによって関連付けられる。さらに、これらのリンクによって日本語の「タイプⅡ」がもつ条件的な意味と視覚動詞の命令形等の諸特徴が明らかにされる。

第６章では、日本語の「タイプⅢ」について考察するとともに、英語の類似構文との比較も行っている。この「タ

イプⅢ」は、否定的応答表現と多義性リンクによって関係付けられ、発話動詞「言う」の命令形と通時的リンク（語彙化）によって関連付けられる。「タイプⅢ」の特徴である否定応答の意味、発話動詞の命令形、限られた語彙との共起性が、これらのリンクによって動機付けられる。一方、英語の類似構文は、感嘆文と多義性リンク、発話動詞 *talk* の命令形と通時的リンク（文法化）によって関連付けられる。なお、第４章から第６章までの議論は、各タイプの命令文が、タイプごとに異なる構文と関連付けられることを示している。このことは、第３章で提案された命令文の分類（すなわち、現実性・非現実性に基づく潜在型・既存型スケールによる３分類）の更なる証拠となる。

第７章では、これまでの考察を基に、意味変化における低レベルスキーマの役割、意味変化の際の単位、構文的アプローチと意味変化との統合的視点、言語機能といった問題が取り上げられる。第８章は結論であり、本研究の目的がいかに達成されたかが、今後の方向性とともにまとめられる。

なお、本論文は、New Zealand Linguistics Society Conference 2005 での口頭発表 “The Type of Imperatives and Mood”、2005 年 12 月に大阪大学に提出された博士予備論文、『言語研究』129 の掲載論文「３つの命令文：日英語の命令文と潜在型/既存型スケール」、*Journal of Japanese Linguistics* 22 の掲載論文 “The V-*te-miro* Conditional Imperative and Other Imperative Forms：Grammaticalization of Lexemes in Constructions” を中心とし、他の命令文研究のデータを統合して、修正・発展させた構成となっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、英語と日本語の命令文を取り上げ、その基本タイプにはどのようなものがあるかを意味的に分類するとともに、その基本タイプが if 条件文、and 等位構造、視覚動詞「見る」や発話動詞「言う」の命令形等と共時的・通時的にどのように関わっているかを考察している。

本論文の評価すべき点は、現実性・非現実性という概念を用い、それを１つの連続体として捉えることによって命令文を３つのタイプに分類していることである。具体的には、話者が命令文の命題内容をこれから実現されるものとして捉える潜在型を「タイプⅠ」とし、その命題内容をすでに実現されたものとして捉える既存型を「タイプⅢ」とし、その中間に当たるものを「タイプⅡ」としている点である。また、「タイプⅡ」と「タイプⅢ」が他の関連する構文と共時的には多義性というリンクをもち、通時的には文法化・語彙化というリンクを有すると提案している。これによって「タイプⅡ」と「タイプⅢ」の命令文の意味的・構文的な特性が明らかになっており、これも本論文の評価すべき点である。

このように本論文には優れた研究成果が示されているが、問題点がまったくないわけではない。たとえば、本論文は命令文を３つのタイプに分類しているが、理論的には４つのタイプに分類可能であるので、それについても何らかの言及が望まれる。また、命令文と関連する各構文間の意味・構造的関係を構文文法理論におけるリンクを利用して関係付けている点で興味深い洞察が得られている一方で、関連づけに用いられる構文やリンクの種類の特定に関しては更なる吟味を要する箇所が見受けられる。命令文の規定に用いられている impositive という意味素性を認定するための検証方法が更に多く提案されれば、より説得的であろう。さらに、「再分析」を用いた考察は、着想そのものは面白いものの、この操作を明確に定義しておく必要があると思われる。そうでないと余りにも強力な操作を理論に導入することになり理論全体の価値が低下する恐れがある。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。